



1972

座談会

## 作家と創造の内面性

出席／野本醇・福井正治・鶴川五郎・竹岡羊子  
後藤庸也・渋谷栄一・小野垣哲之助

司会／伏木田光夫

伏木田 皆さん、忙しいところご出席下さりありがとうございます。今日は、作家と創造の内面性について座談していただくのですが、制作以前の問題や、精神的な問題を語っていただけたらと思います。個人の思想や哲学や美学を出しあってみて、われわれの全体としての方向など考察できると面白いと思います。

渋谷 僕達は確かに、いろいろの問題がカオスの状態のなかにある現代に生きています。世想の混乱、そのなかから新しいものを探そうという現代、創造生活の原点のようなものは皆さん求めていますね。

鶴川 絵画芸術を表現する時、自分の存在感がなければいけない。そうなると当然、体制とのかかわりあい、それをとらえないといけなないのだが、全道展など見ていると、体制と個々のかかわりあいが、なにかあいま

いに思っていました。その点を皆んなと話してみたいと思ってきました。

野本 僕は逆に、内面という非常に個人的な世界だなと考えてきました。詩的なもの、ポエムの問題などですけれど、社会とのかかわりあいも個々のものとして考えているのですが。

鶴川 いや、僕もそれでいいと思いますよ。

伏木田 鶴川さん、個と社会とのかかわりあいの時、体制というのは、どういうふう考えているのですか。

鶴川 体制とは、われわれを含めた民衆と対置するものです。その本質は国家権力であり、その狙いは支配を目指していると思います。われわれ個人は、その体制によって拘束を受け自由を侵害され、常に支配される危機に曝されている。作家はその発想乃至制作に於て、自由

を求める以上、われわれは決して体制に加担したり、馴れ合ったりしてはいけません。つねに自己の真の自由に気を配り、体制による抑圧や侵害を生発し、はね返していく。そうしないと、単なる趣味人や御用作家に墮落すると思います。

**砂田** 貴方のいうことは、体制は政治と切り離せないから、政治と戦う芸術家の問題となるのではないかな。自由美術協会などはその立場を取っているのですが、私はもっとそういう限定ではなく、個の目を大事に行きたいのです。目を通しての、ものの形、造形性を中心に人間の心を考えたいのです。

**鶴川** 僕のいい方は少し舌たらずかな。こうなんです。作家は常に自己と対決していかなければならない。対決する自己とは、内なる自己、何百年の歴史の集積による結果としての自己、地球という空間の網の目の中の1人としての自己、つまり自己内界の内なる存在としての自己と思います。従って、僕が告発し、はね返していかなければならない社会性とは、この自己自身の内界に包含されている社会的存在の自己なのです。決して現在の左翼思想集団のように、現実の反動社会に対して、行動的牙をむくというわけではありません。このへんが混同されたと思います。つまり、体制によって抑圧され、侵害され、支配の危機に曝されている自己内界の社会的脆弱な部分を告発し、はね返していくということです。このたたかいは、あくまでも外部の社会ではなく、自己内界、つまり自分とのたたかいです。それはどんな民衆にも共通することであり、これを純粋に自己の絵画の上でつきつめていけば、人間の普遍的な価値が高まるでしょう。ここにわれわれ作家の存在の意味があると思います。

**伏木田** 砂田さんの造形性優位の創造の内面性と、鶴川さんの体制と自己を非常に精神的深部でとらえようとしている内面は、どちらも芸術家の思考の原点に近いものですね。しかし、同一ではない。高階秀爾の「現代絵画の状況」のなかに「世界全体を混乱と不安の渦中にまきこんだ、あの第一次世界大戦という未曾有の社会的事件が、ドイツ表現主義の画家達を除いて、ピカソやマチス、モンドリアン達にほとんど何の痕益を残さなかったという驚くべき事情は彼らの〈造形表現〉に対する過度の関心……」という文章を読んだことがあります。これなども、作家の二面性をついていますし、ルネッサンス時代のダヴィンチとミケランジェロなども性格論としての作家の二面性を暗示していますね。

**砂田** 鶴川さんのいうことは、わかりました。ただ体

制とか社会性という問題と自己の作画のかかわりあいの時、作家は、テーマ絵画におちいるのでないだろうか。僕はテーマ性のかった絵は好きではない。

**鶴川** 私はテーマ性というより、思想性といいたいのです。造形が単なる感性や抒情的な追求に終るなら、花のような、はかなさがつきまといます。西洋の強さは、感覚主義の造型でも、その背後に確固とした思想があると思います。その思想性を全道展にも要望したいのです。

**全員** くお茶が入り一段落、思想性とテーマ性について、テンデバラバラにガリガリ話し合う。

**小野垣** 僕は、表現の自由ということを考える。鶴川さんの体制論は一つの見方だし、それはそれで良いけれど、一つの見方だけじゃない体制なんて、まるで考えなくても芸術は生まれてくるものでもあるし、自由なんだ。

**野本** 原爆の図をめぐる、ずい分論争された。体制と作家、その芸術性、この3点で論争されたが、結局、作家は個人的に絵画との語りあい、社会との関りあいという立場から出れないのでないか。

**後藤** 社会という奴のゆがみだなあ。

**鶴川** そう、僕はそのゆがみをつきつけないのだ。

**後藤** 僕はストレートじゃないな。それを再構成して出すな。

**伏木田** それでは、皆さん、個と体制や社会とのかかわりあいの問題から、更に個の内面の問題に入りたいと思います。僕自身考えてみますと、思想的には、ずい分実存主義的洗礼を受けていることを告白します。

**砂田** 実存主義ね。

**全員** 話が混乱する。

**福井** 神という問題が出てきますね。

**小野垣** 今、日本で神ということを考えて仕事をしている作家は非常に少ないだろうなあ。

**鶴川** 実存主義というのは、人間の存在を相対的に考え、その状況とのかねあいで考えるから、不条理な状況になげ出された存在と考える。

**砂田** いや、実存主義でなくたって人間は不条理だよ。

**野本** 人間がパニックな状況、ギリギリの状況におかれた時の認識からの実存主義は、確かにわれわれを引きつけますし、現代人の心理と深く結びついていますよ。

**鶴川** 実存主義的思考と創造生活は、僕の場合、反モラルを引き出す。

**伏木田** そう、反モラルは内面において新しいモラル



野本 醇



福井 正治



後藤 庸也

となるんだけど、ここでわれわれは自分中心にモラルを作り、世界の中心となり得るほど偉大なものだろうか。

砂田 いや、ダメダ。人間はそれほど絶体でない。

福井 カミュやサルトルにおいても、不条理のなかでやはり、神が非常に問題となっている。人間を照らすもの、個が個をうつすもの、そういう存在を僕は考えるのです。

砂田 僕も、その通りだ。神といってもイワシといってもいいが、僕もそうだ。僕は神といたい。

野本 霊、僕は霊という。

竹岡 皆んなそうなのね。さっき、日本人で神を持って仕事をしている人は非常に少ないという話が出たが、作家が内面を表白する時、自分の哲学を持とうとすると、個ともう一つの個のぶつかりあいがありますね。そのもう一つのものが、神という形をとり出すのです。

小野垣 個を絶対に信じられるかという、絶対信じてくて絵を描いているみたいところが僕にはあります。

鶴川 そこが不条理なんだよ。

砂田 それを学問的には不条理というかも知れないが、オレはそれを一種の信仰といたいんだ。

福井 さっきの体制の問題にしても、今の神の問題にしても、その主体となる個が、日本人は弱いのではないだろうか。ヨーロッパでは、もっとそれははっきりしていて、キリストは個を照らす、あいまいもことした、もう一つの個ではなく、まさに神なのだ。マチスにおけるパアンスの礼拝堂、ポナルのあのやさしさとレジスタンス運動と彼の個の問題。それらはもっと強い土壌の上に立っているように思います。

渋谷 僕達、弱いものね。

砂田 オレ達弱いよね、本当に個がないよね。

後藤 日本人は個に対しては、だから非常に甘いんだ。それを冷徹に見ようとする時、自虐的になってしまうのも日本人だ。

野本 ナルシシズムと自虐性、これは多いね。

砂田 オレは、そんなに自虐的でないぞ。すごく仏教的なんだ。

竹岡 そうでもないですよ。お気毒になるほどです。(全員大笑い)

全員 <お酒が出て、つもるそれぞれの話に花が咲く。函館から遠路出席された鶴川氏、室蘭から野本氏、厚真から福井氏とく皆んなで飲む酒は一段とうまい。>

渋谷 芸術家が自然や社会と対話する時、われわれは感覚を通して、それをつかむのだけれど、その重要さをもっと認識していいね。

伏木田 たとえば、自然と個の関係で、僕は自然は人間が見る時、ビッチリと観念や、そのように見えるはずだという概念に包まれているのだと思う。それを打ちやぶるものは、詩眼とったり心眼とったりするのだろうけれど、感覚だと思う。考えるより、感じるという芸術家独特の言語は感覚のことですから。

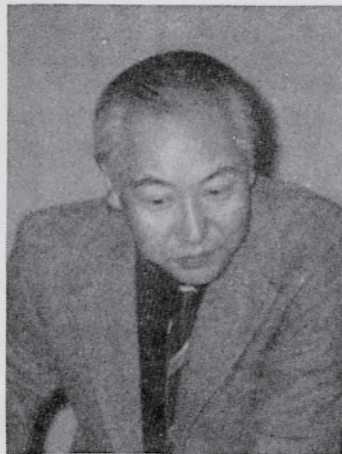
鶴川 感情というのは、生前的なものとし生的なものが混りあったものなのだろうね。

砂田 やはり、きたえられ練られていくものが、感覚でなかるうか。

野本 感覚というより、僕はイメージーションと呼びたいな。僕の場合は、個と自然、社会の接点がイメージーションで結ばれていくのです。



竹岡 羊子



鶴川 五郎



小野垣哲之助

**伏木田** どうやら雑談のなかから、個と自然の問題が出て参りましたので、自然について少し語って下さい。

**砂田** 伏木田さんのいう自然とは、花鳥風月の自然のこと——。

**伏木田** はい、それからすすめて下さい。

**鶴川** 僕は、自己の精神の原点を考える時、自然への回帰ということを考えます。花鳥風月ではなく、裸足で土を踏み、石や木肌や草に触れ、それらを体で再確認するという意味です。

**野本** しかし、現代の自然は、手つかずの自然でないし、ある子供にとってはアスファルト道路も自然となっているだろうし、僕は自然というより、われわれをとり囲む日常性に重要なものを見出します。その部分には自然というものも入りますが、ただこの日常性がプラスチックの日常性になっていく怖ろしさ。内面をけづっていく日常性は、花鳥風月の自然などより、はげしく個の内面をゆり動かします。

**小野垣** 自然をもう一度見ようということがいわれるが、もう一度見た自然は、僕にはあまり関係がないと思う。小さい時、育った自然こそ血肉化し体質を作るのであって。僕はこのごろシャコタンに遊びによく行く。美しいが、これが僕になんの影響をあたえるだろうかと思う。僕自身を作ったであろう自然、僕のなかにあるだろう自然こそが問題です。これは体質とか本性に近いものです。

**竹岡** 私はたまたま九州人です。九州と北海道との個と自然の受けとめ方は少し違っています。この前の飛鳥古墓の古代人といわれる絵の人物にしても、私は小さい時から親しんでいたもので、私も小さい頃からあのように

に描いたし、人間の長い歴史の流れのなかに自然が融和し、その流れに私も生きていたことを知ります。環境や状況により、自然と人間の関係は多様で、決して一面的にとらえることができないと思いますね。

**伏木田** 自然が、とにかくどんどん変貌していつていることはわかります。そして、その自然とのかかわりあいの多様性もわかります。しかし、僕は母と子の関係のように、自然と人間の関係を、われわれは絶えず原始的次点で認識するという事は重要だと思います。

**鶴川** 僕は、自然と人工物を明確に区別します。人工物は自然と人間とのかかわり合いを断ち切るものだと思います。自然の一部なる人間が自然と断絶する時、当然、人間の墮落が起こります。そしてその度合は、年々進行しています。その進行を打ち切るためには、自然再確認のための何らかの営為が要ると思います。

**竹岡** 鶴川さんのいわゆる自然も、もう戦いなくして得られない自然ということで、広い意味での自然、われわれをとり囲むものということなのでしょうね。

**後藤** オレは、自然と人間の間を、もっと掘り下げて考えているんです。オレは人間が受胎したその瞬間まで行くんです。その根元から自分は絶えず見たいのです。

**砂田** 自分はなにものであるか、どこから来たのかというこの根元は、そんなところでみつめる目だろうな。

**伏木田** 自然と個の問題が、いろいろの広がりて語られました。まとめてみると、後藤さんは生命の接点でみようとし、小野垣さんもそれに近い気質や血を重要視しています。竹岡さんや野本さんの日常性の重視も、自然というものを多様性のなかでとらえる行き方で、自然と人工を丸ごと、押し寄せ、とりまいて日常として



伏木田光夫



渋谷 栄一

みつめようとして。鶴川さんの自然への回帰論はアクション（行為）を含んでいて、僕なぞ、鶴川さんに一番近い考えを持っていますが、それぞれの自然との関わりあいが出ていて面白く思います。

それでは最後に、個が体制や社会や自然や日常と対話したり対決したりしながら、うちふるえ内面から吐き出す行為について話して下さい。

砂田 自分はどこから来、なにものであるかと思って絵に出てこないのは、なんて不自由なんだろうな。色、形、この造形性の不自由なこと——（全員大笑い）

小野垣 でも、本人が考えているほど出ないもんじゃないんじゃないかな。本人の持っているものは、いやでも出てくる。そうじゃないかな。楽観視しているところも僕にはあります。そのために、いろいろの拘束からとき放たれた自由が必要なんだ。

砂田 ところが、自由というのは拘束のなかからしか得られないじゃない。

竹岡 そうね。自由の自由なんてあり得ないわ。

砂田 色や形を通して、心を発言することしかオレにはないし、絵描きはそういうものなんだよ。五十六歳というオレにあたえられた枠がこれなんだ。

野本 僕なんかはキャンパスに向った時、一番不自由を感じます。逆説なんだな。

鶴川 拘束があるから自由になりたいんだよ。

伏木田 自由になりたいという行為が、自由なんですわね。

全員 自由についての話が、うずを巻く砂田さんは造形空間のなかに自由を見出そうとするのが作家であると発言し、生活空間に自由を求めようとする意見とぶつか

りながら、話は絵画空間論の方に流れて行く。座談はこれから一時間半におよぶが、紙面の関係で「作家と創造の内面性」というテーマで押さえました。ここに記した座談も非常にちじめましたので、出席者の意と違ったものが出たかも知れません。お赦し下さい。（編者）



カット・菊地 精二